

震災と原発事故で大きな痛

が参加する。本格的な活動は

を協議し、福島ブランドの創

化や従事者減少などの課題に

手を被った本県農業の復興を

新年度からで、当面は被災地

設、共同プロジェクトの展開、

直面している。原発事故被災

目指す研究者らの組織が「復

の現状を発信するフォーラム

単位互換制度の実現、復興農

地である福島はマイナス材料

興農学会」という名称で動き

場の出前講座、被災地ツアー

学会の立ち上げなどが提案さ

から少しでも光明が見いださ

だす。農業は地域の暮らしの

、大学の共同研究などの

活動を想定している。

するが、間口は広く取るべき

基盤だ。原子力災害という特

六機関は「復興知」の共有

だ。福島に関心を持つ多くの

やロボット、有機栽培など時

殊要因で基盤が損なわれた本

による新事業創出が期待さ

研究者、専門家をさまざま

取り込むことで日本の農業の

県には多くの専門家が訪れ、

再生に向けた知見を寄せてく

れた。それが知のネットワーク

先進地にもなりうる。

クとして組織化されれば、さ

らに大きな力になる。災害や

シンポでは、現代の農学に

は縦割りの弊害もあるが、最

過疎などに伴う現代農業の課

題は全国にある。本県の経験

後はおいしくて安全な食べ物

という成果に収れんできると

から生み出された対策が、日

本十二月、事業の一環として

福島県の認知度は高まる。

元で考えているより世界から

本県の農業の将来を担う普遍的

な価値にもなりうるはずだ。

「『復興知』実装社会シンポ

注目されているという。世界

学会は食農学類ができた福

島大が中心となり、郡山女子

シウム」を福島市で開き、そ

で、アイデアが刺激され、相

大、福島高専、東京大、東京

れぞれの取り組み経過などを

報告した。

乗効果が生まれるはずだ。

農大、東京農工大の計六機関

この機会に今後の事業展開

日本の農業は国際競争の激

待する。(佐久間 順)

## 多分野の知の結集を